
大乱闘スマッシュブラザーズX ～ 亜空の使者・序章編～

知蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大乱闘スマッシュブラザーズX（亜空の使者・序章編）

【Nコード】

N7890E

【作者名】

知蔵

【あらすじ】

大乱闘スマッシュブラザーズXの亜空の使者にてゲーム本編の前に起きた話。マスターハンドによって創られた世界……だが、この世界を我が物にしようと怪しい影が暗躍している事をファイター達もマスターハンドも誰も知らない……。

第一話　操られし創造欲の化身

この世界にはファイターと呼ばれるフィギュアの者達が住む世界。彼らは戦闘不能に陥る事によって元のフィギュアとなってしまう。そんな世界を創りあげた者、それは……………

創造欲の化身・マスターハンド。

彼は今、亜空間と呼ばれる『この世界』とは違う世界にいた。

マスターハンド（以下Mハンド）「フッフ、今回私が主催した大乱闘の闘技大会……………何人のファイターが集結するか楽しみだ。」

マスターハンドが低い声で呟いていると……………。

？「フッ、フフフフ……………」。

Mハンド「！！……………だ、誰だっ！？」

マスターハンドが後ろの方へ向くと、半透明で大きな人型の者が宙に浮いていた。

Mハンド「貴様……………何者だ！？」

？「我が名はタブー、この亜空間を支配する者。」

Mハンド「亜空間の？」

タブー「そう。そしてお前の創った『この世界』の支配者ともなるであろう。」

Mハンド「なっ！何だと！？」

タブー「そこでお前にも協力してもらおう。」

Mハンド「ふざけるな！それに何故私が……！！」

タブー「お前はこの亜空間と向こうの世界を両方行き来出来る……
……だからお前にも……。」

Mハンド「誰が貴様の言いなりになるか！！」

マスターハンドは拳を握り絞めると、そのまま勢いよくタブーへと突進するが……。

Mハンド「なっ！き、消えた！？」

タブーはマスターハンドの拳が迫る直前で消えてしまった。

Mハンド「ど、何処だ！？」

タブー「ここだ。」

Mハンド「!？」

マスターハンドは後ろの方を向こうとした時……。

グサッ！グサッ！

Mハンド「ぐわあっ!!」

タブーの手から放たれた2本の光の鎖がマスターハンドの指に刺さった。

タブー「創造欲の化身が聞いて呆れる。」

Mハンド「き、貴様………な、何を……!？」

タブー「お前にはしばらく私の操り人形となってもらおう。」

M「だ、誰が貴様なんぞに……………」

グサッ！グサッ！グサッ！

Mハンド「があっ！！」

さらに3本の光の鎖が残りの指に突き刺さる。

タブー「これでお前は今から我の操り人形だ。」

Mハンド「ぐうっ！おのれ……………！！」

そしてマスターハンドはそのまま指の先をぐったりとさせた。

タブー「これで向こうの世界に干渉出来る。次に向こうの世界から部下を配備しなければ……………」

こうして『この世界』への危機が迫って来たのです。そして……。

激しい大乱闘幕開けなのです。

第二話〜集結する悪のファイター達〜（前書き）

この話にはスマブラXの悪役の奴らが登場します（約一名は微妙）。
キャラが崩れないように書いたと思います……。

第二話　集結する悪のファイター達

マスターハンドの創った世界のとある森の中に、一匹（一人？）の亀がイライラしながらウロウロしていた。

？「……　　つたく、いつまで待たせるつもりなのだ！？」

彼はクッパ大王。キノコ王国の姫、ピーチを何度も拐ってはいつもマリオに邪魔され何度も失敗しているクッパ軍団のボスである。

クッパ「それにしても、一体我輩を呼び出したのは何処のどいつなのだ！」

ブロロロロツ！

その時、森の奥からバイクのエンジン音が響き渡る。

クッパ「ん？何だ？」

クッパが音が鳴る方へ振り向くと……………。

ドカーーーッ！！

バイクに乗っていた何者かが木にぶつかる。

？「いててて……俺様とした事がブレーキを踏むタイミングが遅れちまったぜ。」

バイクに乗っていたヒゲを生やした中年男は頭を抑えながらゆっくりと降りる。

クッパ「お前は……………ワリオか！？」

ワリオ「ああ？そうだよ！俺だよ、ワリオだよ！！……………って、よく見たらクッパじゃねえか。」

この下品な男の名はワリオ。マリオのライバルでありトレジャーハンターで各世界のお宝を探し回っている金に汚い男である。

クッパ「何でお前がここにいるのだ？」

ワリオ「お前こそ、ここで何してやがんだ？」

クツパ「我輩は何者かに呼び出されたのだ……………何て言うか……
…頭の中に声が聞こえてきたのだ。」

ワリオ「何っ！？実は俺様も呼び出されたんだよ！お宝をやるから
来いってな。」

クツパ「…………お前は相変わらずお宝に弱いな。」

クツパが軽く頭をかかえていると……………。

？「来たか…………クツパにワリオよ。」

クツパ「……………だ、誰がいるのか！？」

ワリオ「隠れてないで出てこい！！」

すると突然、巨大な右手が半透明で現れた。

ワリオ「わっ！何だこのバカデカイ手は！？」

？「私はマスターハンド、この世界の創造者である。」

クッパ「お、お前が我輩達を呼び出したのか！？」

Mハンド「そうだ。お前達に力を貸してほしくてな……………」

ワリオ「けっ！偉そうに…………俺様に物を頼む時は……………」

Mハンド「勿論タダとは言わん。」

パチッ！

マスターハンドが指を鳴らすと袋に入ったコインが落ちてきた。

ワリオ「わおっ！コインじゃねえか！！」

Mハンド「もし私の力になれば、もっともっとコインが手に入るが？」

ワリオ「そういう事なら俺様は喜んで協力してやるぜ！」

Mハンド「それにクッパよ……お前も私に協力してくれば、お前の憎むべきマリオなど簡単に倒せるが？」

クッパ「な、何だと!？」

クッパは驚きを隠せなかった、そして……。

クッパ「……………いいだろう!マリオを倒すついでに協力してやる!」

M「よし、それとメンバーはもう二人いるんだが……………」

パチッ!

マスターハンドは再び指を鳴らすと、二つのフィギュアが現れる。
一つはマントを着た赤い髪の黒人の大男のフィギュアと、もう一つは全身真っ黒で平面の人型のフィギュアであった。

クッパ「まさかコイツらもメンバーなのか？」

ワリオ「この大男はともかく、このペラペラな奴は何だ？」

Mハンド「とにかく再起動させるのだ。」

そう言われると、クッパとワリオはそれぞれのフィギュアのプレート部分に触れた。

パアアアッ！

同時に光が放たれ、フィギュアになっていた大男と平面人間は実体化した。

？「うつっ……………ん？ここは……………」

平面人間も状況が掴めていないらしく、キョロキョロと辺りを見回す。

Mハンド「気がついたか？ガノンドロフ、それにMr・ゲーム&ウオッチよ。」

ガノンドロフ「！？……………お前が俺を復活させたのか？」

クッパ「復活させた？」

Mハンド「そう、彼はリンクという勇者に倒されて封印されていた
私が封印を解いてあげたという訳さ。」

ワリオ「あっそ、そんで？このペラペラ人間は何々だ？」

Mハンド「彼は訳あって、この世界とは違う世界から私が連れてきた。」

クッパ「訳？」

ガノンドロフ「それより、何故俺を解放したか教えてもらおうか。」

M「簡単な事さ。お前の力を貸してほしくてな……………」

ガノンドロフ「フン！この俺がそんな要求を聞くと思うか？」

ガノンドロフはとっさに構えるが……………。

ガノンドロフ「……………」と言いたい所だが、お前には借りがあるから
な……………及ばずながら、このガノンドロフも協力してやろう！」

M「……………ほう、意外と物分かりがいいな。」

ガノンドロフ

「こう見えても俺は受けた恩はきちんと返す男なんでな。」

ワリオ

「けっ！……………そんで？メンバーが決まった所で、これからどうすんだ？」

Mハンド

「まずお前達には、ある島を占領してほしい。」

クッパ

「島？」

Mハンド

「エインシャント島という島だ。」

ガノンドロフ

「エインシャント島？」

Mハンド

「その島はロボット達によって作られた高度な科学技術をもつ島だ。」

ワリオ「要するにその島を乗っとれって事だろ？」

M「そういう事だ。」

クッパ「よし！では早速、クッパ軍団を配備しなければ………！」

ガノンドロフ「俺も復活したばかりだから、少し体を鍛えねば……。」

ワリオ「あ！俺様もバイクの修理をしなければ………！！」

Mr.ゲーム&ウオッチは壊れたバイクを引っ張るワリオに付いて

行く。

ワリオ「コラ！俺様に付いて来るな！！」

クッパ達が去った後、マスターハンドはゆっくりと消えてゆく。

Mハンド（フフフフ……少し楽しませてくれよ……悪のファイター達よ……。）

第二話〜集結する悪のファイター達〜（後書き）

いかがでしたでしょうか？何かガノンドロフが微妙でした……。因みにゲーム&ウオッチは喋らない設定にしました。このように若干設定が変わります（でも、そんなに大きく変えるつもりはありません）。

第三話　占領されしエインシャント島

この島の名はエインシャント島。高度な科学技術を備えているが、何故か暮らしているのはロボットののみ。その平和な島に突然魔の手が忍び寄ってくるのである……………。

ドスンッ！

突然何かが地面に落ちたような大きな音が響き渡り、ロボット達が一斉に集まる。

クツパ「ここがエインシャント島という所か。」

ガノンドロフ「ああ、間違いない。」

ワリオ「結構デカイ島だな。」

そこにはクツパ、ワリオ、ガノンドロフ、Mr.ゲーム&ウオッチの四人がいた。

？「ア、貴方達ハ誰ナンデスカ！？」

他のロボットより一回り大きなロボットがクツパ達に尋ねる。

ワリオ「ああ？ロボットがこんなに沢山いやがるぜ。」

クツパ「この島はロボットしかないのか？」

ガノンドロフ「どうやらお前がボスのようだな……………短刀直入に言おう！我々はこの島を占領しに来た！！」

ロボット「ナ、何デスツテ！？」

ガノンドロフの唐突の言葉にリーダーのロボットは驚愕する。

ワリオ「…………一応言っておくが、無駄な抵抗はしない方がいいぞ。」

ロボット「誰ガ貴方達ナンカノ言イナリニナルモデスカ！コノえい
んしゃんと島八誰ニモ渡シマセン！！」

クツパ「……………フン！大人しく従っていれば良いものを……………」

他のロボット達は一斉にクツパ達に襲いかかるが……………。

ロボット「ソ、ソシナ……………」

一瞬でロボット達は殆どクツパ達に壊されてしまった。

ガノンドロフ「どうだ？これで少しは従う気になったか？」

ロボット「ウウ……………」

ロボットは言葉が出なかった。

クッパ「大人しく我々に従うのであれば、これ以上お前の仲間を壊す事はしない。」

ロボット「……………」。

ワリオ「どうすんだよ!？」

ロボット「……………分カリマシタ……………貴方達ニ従イマス。」

ワリオ「フン! やつと降参しやがったか。」

?「……………良くやったぞ……………お前達……………」。

ロボット「!？」

突然マスターハンドが半透明で姿を現した。

ロボット「ナ…………何デ大キナ手…………。」

ガノンドロフ「このお方は我らのマスターだ。」

ロボット「ま、ますたー？」

Mハンド「この島のロボットだな…………やはりこの島はかなり高度な科学技術を備えているな…………。」

ロボット「ナ、何故コノ島ノ事ヲ…………。」

Mハンド「フッフ…………私はこの世界の創造者だからな。」

ロボット「創造者…………。」

Mハンド「それよりも、早速お前達に作ってもらいたい物があるのだが…………。」

パチッ！

マスターハンドが指を鳴らすと、数枚の設計図が現れた。

ロボット「コレハ……。」

Mハンド「見ての通り設計図だ……出来るだけ早く完成させてほしい。」

ロボット「……ワ、分カリマシタ……。」

ロボットはこれ以上仲間に無駄な犠牲を出したくない為、大人しく従った。

ワリオ「そんで？俺様達は今からどうすりゃいいんだ？」

Mハンド「お前達は発明品が完成するまで待機しておれ。」

クッパ「では、少しこの島を調べてみるか……。」

ワリオ「俺様はこの島にお宝がないか探して来ようっと！」

そう言うとクッパとワリオは何処かへ行ってしまった。

ガノンドロフ（フン！暇な奴らめ……。）

Mr.ゲーム&ウオッチはガノンドロフの回りを歩いていた。

Mハンド（フフフフフ……。ここまでは順調だな……。我の計画はもう誰にも止められない……。）

Mハンドは再びゆっくりと消えてしまった。

第三話　占領されしエインシャント島　（後書き）

ロボットの口調をかたごとにしました……まあロボットですから……いつも短い小説を書いてすいません！次からは出来るだけ長く書きたいと思います！

第四話　それぞれの平穏な日々

一方ここはファイター達が激闘を繰り広げるスタジアム。そこに向かう者がいた。

？「……………まったく、アイツらは何処へ行ったんだ？」

赤い帽子にオーバーオールを着た男、マリオは頭をかきながら溜め息をついていた。

？「マリオ、もうあまり時間がないわ。」

マリオの隣にいるピンクのドレスを着た姫、ピーチがマリオを急かす。

マリオ「うーん……………仕方ない、先に行きましょうピーチ姫。」

ピーチ「そうね。」

二人がスタジアムに入ろうとした時……………。

？「あの、すみません！」

マリオ「な、何だ！？」

突然黒いローブを着た女性がマリオ達に近づいてきた。

ピーチ「あの……何でしょうか？」

？「お願いです！私を匿って下さい！」

マリオ「え？匿うって……。」

？「おい！その者！！」

マリオ「へっ！？」

今度は兵士のような格好をした男二人がマリオ達に訪ねてきた。

兵士A「ゼルダ姫様を見なかったか？」

マリオ「ゼルダ姫？」

するとローブの女性はピーチの後ろに隠れた。

ピーチ（……………まさか。）

兵士B「どうなんだ？見たのか見てないのか！？」

ピーチ「えーっと……………その方なら確か向こうへ行きましたわ。」

ピーチは左の方向に指をさした。

兵士A「何っ！本当か！？」

兵士B「よし！行くぞ！！」

兵士二人はピーチが指さした方向へ走り出した。

マリオ「何だっ たんだ？」

？「あ、あの……ありがとうございます。」

ピーチ「やっぱり貴方は……。」

？「はい……。」

ローブの女性はゆっくりとフードを下ろすと、美しく気品に満ちた女性の顔が露になった。

ゼルダ「私がゼルダです。」

マリオ「え？あ、貴方が！？」

ピーチ「貴方もお姫様のようだけど、何故兵士から逃げていたの？」

ゼルダ「それは……。」

ゼルダは顔をうつ向く。

ピーチ「良かったら話してみて。」

ピーチの言葉にゼルダはゆっくりと口を開く。

ゼルダ「私……最近城から外へ出た事がなかったなので、それで思い切って外へ出てみたのです。」

ピーチ「成程……その気持ち分かるわ。」

マリオ「ピーチ姫もたまに城から抜け出しますよね？」

ピーチ「ちょ、ちょっとマリオ!!」

マリオの言葉にピーチは慌てる。

ゼルダ「あら？貴方も外へ？」

ピーチ「え、ええ………たまに……。」

ピーチは小さな声で答える。

マリオ「ところで、ゼルダ姫はこれからどうしますか？」

ゼルダ「そうですね…………外へ出てみたのは良いけど、これからどうすれば…………。」

ピーチ「だったら、私達と一緒に行く？」

ゼルダ「え？」

ピーチの言葉にゼルダは驚く。

ピーチ「私達これからあのスタジアムに行くの。」

ゼルダ「スタジアム？」

ピーチ「ええ、マリオが選手として選ばれて出場する事になって、私も応援で付いて来たのよ。」

マリオ「宜しければゼルダ姫もピーチ姫と一緒に観戦しては如何ですか？」

ゼルダ「…………私が一緒に宜しいのですか？」

ピーチ「勿論よ！」

マリオ「遠慮なさらないで下さい！」

ゼルダ「……………ありがとうございます！マリオさん、ピーチさん
！」

ピーチ「ピーチでいいわよ。」

マリオ「僕もマリオで結構ですよ。」

ゼルダ「は、はい…………。」

ピーチ「それじゃあ早速行きましょう！」

マリオ「そうですね。」

三人はスタジアムの方へ歩く。

ピーチ「マリオ、試合頑張ってね。」

マリオ「任せて下さい！」

マリオとピーチが話している所をゼルダは羨ましく見ていた。

ゼルダ

「フフ……二人共、仲が良ろしいのね。」

ピーチ

「え！？そ、そう？」

ゼルダ（リンク……今頃どうしてるかしら……。 ）

ゼルダは悲しい表情を浮かべる。

マリオ

「どうかしましたか？」

ゼルダ

「い、いえ……何でもありません。」

ピーチ
「？」

マリオ（それにしても、ルイージとヨッシーは何処へ行ったんだろ？）

三人はスタジアムの中へと入って行った。

ズドーン！！

突然スタジアム付近に巨大な星が落ちてきた。

？
「……………ぽよ？」

すると、ピンク色の丸い生物こと星のカービィが乗っていた星から

地面に着地する。

カービィ

「ぽーぽーいー!」

カービィはスタジアムを見るなり、飛び跳ねながら入口へ入って行った。

?

「おい!兄さん!ピーチ姫!ヨッシー!」

とある山道で緑色の帽子が印象的でマリオの弟、ルイージがマリオ達を探していた。

ルイージ

「ハァ………完全にみんなとはぐれちゃったみたい………僕一人じゃ不安だな。」

ルイージはひたすらマリオ達を探し続ける。

？

「ふあゝ、みんな何処へ行っちゃったんだろう？」

ある森の奥で緑色の恐竜、ヨッシーが森の中をさま迷っていた。

ヨッシー

「ひどいよなゝ、僕を置いて先に行っちゃうなんて……。」

ヨッシーはブツブツと愚痴を溢しながら森の中を歩いていると……。

ヨッシー

「ふあゝ……………何か眠くなってきたなあ……………」

アクビをしながらそう呟くと、一つの大きな切株の前に止まる。

ヨッシー

「少しここで昼寝でもしようっと！」

そう言つとヨッシーは切株の上で横になり、すぐに眠ってしまった。

同じくこの森の中に緑色の服と盾を備えてる少年が歩いていた。

？

「なあナビィ、ガノンドロフが復活したって本当なのか？」

少年は回りを飛び回っている妖精、ナビィに問いかける。

ナビィ

「何よリンク！疑ってるの!？」

ナビィはリンクという名の少年の言葉に腹を立てる。

リンク

「い、いや……………そういう訳じゃ……………ただ信じられないんだ……………あんなに苦勞して倒したアイツが復活したなんて……………」

ナビィ

「私も詳しい事は知らないけど……………何でも仲間の話によると大きな手の化物がガノンドロフを復活させたって噂なの。」

リンク

「大きな……………手？」

リンクは深く考え込む。

リンク

「……………とにかく、あのガノンドロフを復活させたんだ。相当強い奴なんだろうな……………」

ナビィ

「そうね。ガノンドロフとその手の化物が組んでいたら、かなり厄

介ね。」

リンク

「だからまたこの森に来たんだろ？あの剣を再び手に入れるために……。」

ナビィ

「伝説の聖剣……マスターソードね。」

リンク

「ああ……。」

リンクは何かを考えながら歩く。

ナビィ

「……ねえリンク、今ゼルダ姫の事考えてたでしょ？」

リンク

「なっ！？何でゼルダ姫が出てくるんだよー！！」

ナビィ

「はーん、さては図星ね。」

リンク

「ば、馬鹿な事言っでないで早くマスターソードを探すぞ!!」

リンクは早足で駆け出す。

ナビィ

「あ!待ってよ、リンク。」

ナビィは慌ててリンクの後を追う。

リンク（ゼルダ姫……今どうしてるかな……。）

空の上の彼方に天空界と呼ばれる国があり、女神パルテナがこの国を納めている平和な国である。

？

「……………よし!パトロール終了っ!」

若くしてパルテナ親衛隊の隊長を務める天使の少年、ピットが天空界のパトロールを終えて帰って来た。

？

「ご苦労様、ピット。」

ピット

「あつ！パルテナ様！！」

ピットはパルテナの姿に気づくと、すぐさま近づき跪く。

ピット

「たつた今、天空界のパトロールを終えた所です。」

パルテナ

「いつも貴方には苦労を掛けてしまいますね。」

ピット

「いえ！この前のメデューサの件がありましたから！」

パルテナ

「そうですね、いつまたこの天空界が狙われるか……………」

ピット

「大丈夫ですよ！我々パルテナ親衛隊が命に換えてもパルテナ様をお守り致します！」

ピット

「ありがとう、ピット。」

ピットの言葉にパルテナは微笑む。

ピット

「それでは失礼します！」

ピットは少し駆け足で歩く。

パルテナ

「そんなに慌ててどうしたんですか？」

ピット

「今地上界で何やら大乱闘をやるそうなので、地上界を映し出せる神殿の泉で観戦しようと思って……………いけない！もう始まっちゃうー！！」

ピットは今度はダッシュで神殿に向かう。

パルテナ

「フフ、やはりまだ子供ね。」

？

「やったよー！ナナーー！！」

？

「やっと頂上まで登ったね！ポポ！」

何処かの雪山の頂上で、お揃いだがい少し色が違う厚着を着ている男の子のポポと女の子のナナこと、アイスクライマーの二人が喜びを

分かち合っていた。

ポポ

「ねえ、ナナ。」

ナナ

「何？ポポ。」

ポポ

「僕達、もうこの辺りの雪山は登りきっちゃったよね。」

ナナ

「そうね、何だかつまんないわ。」

ポポ

「そこで提案があるんだけど……………」

ナナ

「何ター？」

するとポポは懷から一枚の地図を取り出す。

ポポ

「この辺りに僕達がまだ登山してない山があるんだ。」

ナナ

「じゃあ、そこへ行きましょー！」

ポポ

「よーし！レッツゴーー！！」

ポポの掛け声と共にアイスクライマーの二人は急いで雪山を下山して行った。

そんな平穏な日々を送っている彼らが、これから大きな事件に遭遇するという事は勿論この時は誰一人知らない。

第四話〱それぞれの平穏な日々（後書き）

……という訳でこの話に登場したキャラはゲーム本編まで事件に気付かないので、こつゆづ風にまとめました。次の話でいよいよ奴らが動き出します！こつこ期待！！

第五話 ついに動き出す亜空軍（前書き）

ついに亜空間が行動を開始します！クツパ達がどんな任務を受けたか覚えてたら分かると思います。更に最後ら辺に亜空軍とは関係ないキャラが二人出てきます。

第五話 ついに動き出す亜空軍

一方エインシャント島ではクツパ達がマスターハンドに呼ばれて、工場みたいな建物の中に集まる。

クツパ「今度は一体何の用なのだ？」

ワリオ「それにしても、この回りにある丸い物は何だ？」

Mハンド「それは亜空間爆弾だ。」

突然マスターハンドがまた半透明の姿で現れた。

ガノンドロフ「亜空間爆弾？」

Mハンド「この爆弾が爆発すると、辺り一面亜空間に飲み込まれるのだ。」

クツパ

「亜空間？何だそれは？」

Mハンド

「亜空間とはこの世界とは別の次元にある世界だ。」

ワリオ

「……………よく分かんが、その爆弾を爆発させてどうすんだ？」

Mハンド

「亜空間爆弾が爆発した場所は亜空間に引き込まれる……………つまりこの世界全体を亜空間に引き込むのだよ！」

クッパ&ワリオ

「なっ!?!」

クッパとワリオは驚愕するが、ガノンドロフは冷静だった。

ガノンドロフ

「成程、そうすれば世界は我々の物……………という事か。」

Mハンド

「だが、その計画には……………この世界のファイター達が邪魔になる。」

クッパ

「ファイターってマリオもはいつてるのか？」

Mハンド

「勿論。」

ワリオ

「まさか俺様達が、そのファイター達を倒せって言っんじゃないだろうな。」

Mハンド

「心配ない、これがある。」

パチッ！

マスターハンドが指を鳴らすとロボット達が台車に何かの機械を乗せながら運んできた。

クッパ

「何だ？これは。」

Mハンド

「これはダークキャノンといって、引き金を引くと矢印のような弾が飛び出し、これに貫かれた者は一撃でフィギュアと化してしまう。」

」

クツパ

「い、一撃だと!？」

ワリオ

「マジかよ!？」

再びクツパとワリオは驚愕する。

Mハンド

「そこでクツパとワリオよ!お前達にはこのダークキャノンでファイター達をフィギュアにし捕獲してくるのだ!」

クツパ

「何故捕獲せねばならないのだ？」

ガノンドロフ

「ファイター達が二度と復活しないように閉じ込めるために決まってるだろ。」

クツパ

「な、成程……。」

ワリオ

「その仕事引き受けてもいいが、お礼はちゃんと払ってくれよ?」

Mハンド

「勿論だとも、沢山フィギュアを集めれば金も沢山手に入るぞ。」

ワリオ

「よっしゃ!燃えてきたぜ!」

ガノンドロフ(フン、金の亡者め!)

Mハンド

「更にお前達にもう一つ良い物をやろう。」

パチッ!

再びマスターハンドは指を鳴らすと、ロボット達が今度は乗り物のような物を運んできた。

ワリオ

「こりゃ乗り物か?」

Mハンド

「そうだ、このカーゴは移動がかなり楽でマジックハンドも付いている優れ物だ。」

ワリオ

「おお！俺様これ気に入った！！」

ガノンドロフ（……………マスターハンドはロボット達にこれらを作らせてたのか…………。）

クッパ

「……………ところでマスターハンド。」

Mハンド

「何だ？」

クッパ

「アイツは何かの役に立つのか？」

クッパは回りにある亜空間爆弾を眺めているMr・ゲーム&ウオッチに指をさす。

Mハンド

「勿論、奴は役に立つ。」

ワリオ

「どこが！？ただ俺様達の後を付いて来てるだけじゃねえか！！」

Mハンド

「……………よし、じゃあ奴の力を見せてやろう……………Mr・ゲーム＆ウオッチよ！」

マスターハンドが呼ぶとゲーム＆ウオッチはピコピコと音を出しながら近づいてくる。

Mハンド

「今ここで影虫を出すのだ。」

ガノンドロフ

「影虫？」

するとゲーム＆ウオッチの全身から黒い物体が湧き出てくる。

クッパ

「な、何じゃこりゃ!？」

更に黒い物体は一ヶ所に集まると、緑色のボディに人形のような体格の怪物に変化した。

ワリオ

「おお!？何か変化したぞ!！」

Mハンド

「このように奴の体から湧いて出てきた影虫が一ヶ所に集まると、こんな怪物を生み出せるのだ。因みにこれは一般的にプリムと呼ばれる。」

ガノンドロフ

「何と……こんな事が出来るのか……。」

Mハンド

「それだけではないぞ。」

次に影虫はゲーム&ウオッチの全身に集まると、同じくゲーム&ウオッチに変化する。

クッパ

「ペ、ペラペラ人間が二人になったぞ!？」

Mハンド

「影虫がゲーム&ウォッチのデータを読み取り、コピーしたのだ。」

ガノンドロフ

「それなら、この影虫を捕獲したファイターに使えば……………」

Mハンド

「その通り!どんどん我々の勢力が増えるのだ。」

ワリオ

「ガハハハ!まさに金に金棒だな!！」

クッパ

「それを言うなら鬼に金棒ではないのか？」

ワリオ

「そうだったか？」

Mハンド

「と、とにかくお前達はファイター達をフィギュアにし捕獲してくるのだ!」

ワリオ

「よし！早速このカーゴで行って来るぜ！！」

ワリオはカーゴに乗り込むと、すぐさま出発してしまった。

クッパ

「よし！我輩もクッパ軍団を集結されなければ……。」

クッパもワリオに続いて行ってしまった。

Mハンド

「ところでガノンドロフよ。」

ガノンドロフ

「何か？」

Mハンド

「お前には我が軍の司令官として働いてもらいたいのだが……。」

ガノンドロフ

「お、俺が司令官？」

Mハンド

「お前にはあの二人とは違う強さを持っている……それを見込んで頼んでいるのだ。」

ガノンドロフはしばらく考え込む。

ガノンドロフ

「……………ありがとうございます！この期待に答える働きを致します
！！」

ガノンドロフはすぐにマスターハンドに跪く。

Mハンド

「うむ、それからお前にこれを渡しておこつ。」

パチッ！

マスターハンドが指を鳴らすと、一枚の設計図が現れる。

ガノンドロフ

「これは？」

Mハンド

「今開発中の設計図だ……この戦艦の動員をお前に任せたいと思う。」

ガノンドロフ

「光栄でございます！」

Mハンド

「話は以上だ、下がってよい！」

ガノンドロフ

「ハハッ！」

ガノンドロフは立ち上がり、ゆっくりと去って行く。

ガノンドロフ（フッフ………奴に隙ができれば、この軍を乗っ取る事など造作もないわ………それまでは従うフリをして奴の目を欺けなければ………。）

ガノンドロフは去り際に怪しい笑みを浮かべる。

Mハンド

「……ところでマスターロボットよ。」

ロボット

「ナ、何デスカ？」

マスターハンドは近くにいたロボットに話掛ける。

Mハンド

「お前にも働いてもらいたいのだが……。」

ロボット

「ドウセ私二八拒否権ハ無イノデシヨ？」

Mハンド

「フフ……分かっているではないか……お前にはこの亜空間爆弾を各地に設置してほしいのだ。」

ロボット

「ワ、私一人デコンナ大キナ物ヲ？」

Mハンド

「お前の移動用のメカは作ってある……それに
お前一人では亜空

間爆弾をセット出来ないから手下を何体か引っ張ってこい。」

ロボット

「ソナナ……。」

Mハンド

「分かったかな？」

ロボット

「……………ハイ。」

Mハンド

「よし、では早速準備を済ませてくるがよい。」

ロボットは部下達を連れてゆっくりと去って行った。

Mハンド（さて仕上げは……………。）

パチッ！

マスターハンドがまた指を鳴らすと、ゲーム&ウォッチの前に一枚の地図が現れた。

Mハンド

「Mr. ゲーム&ウオッチよ、その地図に印が書いてある場所へ行き、そこにある戦艦を奪ってくるのだ。」

ゲーム&ウオッチは

「何で？」と言いたげに首を傾げる。

Mハンド

「お前がその戦艦を操縦して、影虫を各地にバラまくのだ。」

ゲーム&ウオッチは

「ええっ!？」と言いたげに驚く。

Mハンド

「そんな分かりやすいアクションはいいから、早く行って来い!」

ゲーム&ウオッチは慌てて出て行く。

?

「只今戻りました!」

Mハンド
「ん？」

マスターロボットは全身に緑色のフードを纏って、目だけ露になつて姿で現れた。

Mハンド
「その格好は何だ？」

ロボット
「……………」

マスターロボットは何も答えなかった。

Mハンド
「まあいい……………では早速、亜空間爆弾の設置と発動の任務に向かえ！——」

ロボット
「了解……………」

マスターロボットは小さく呟くと、移動用の機械に乗り込み、亜空間爆弾をぶら下げながら部下のロボット達を引き連れて去って行く。

Mハンド（フフフ……これでこの世界は我が亜空軍の物になる日もそう遠くはない。）

マスターハンドは静かに消えてゆく。

ドオオオオッ！！

エインシャント島にある遺跡付近に一見ロケットのような宇宙船と赤・青・黄色の小さな宇宙船らしき物が同時に不時着する。

パアアアッ。

？

「ふう、やっと着いた。」

すると宇宙船ことドルフィン初号機から宇宙服を着た二等身位の大
きさの男、キャプテン・オリマーが背伸びしながら出てくる。

オリマー

「それにしても参ったな……社長にまた『お宝を集めてくれ！』
って言われたから、またピクミンを連れて宝探しをする破滅になる
とは……。」

そう言いながらオリマーは三種類の小型宇宙船ことオニヨンに近づ
く。

ピーーーーッ！！

オリマーが笛を吹くと、三種類のオニヨンから赤・青・黄・紫・白
のピクミンが次々と出てくる。

オリマー

「また君達と冒険をする事になっちゃったけど、宜しくね。」

ピクミン達は飛び跳ねたり、片手を上げたりした。

オリマー（……………喜んでいるのかな？）

そう思いながらオリマーは凡そ30匹いるピクミンを整列させる。

オリマー

「それでは早速レッツゴー！-！」

オリマーは掛け声と共に歩き出すと、ピクミン達もオリマーに続いて歩き出す。

プシュウウウッ！-！

また別の遺跡付近で黄色い宇宙船が不時着した。

？

「……………この星なら良さそうね。」

宇宙船スターシップの運転席から全身に赤い鎧のようなパワードスーツに覆われた女性、サムス・アランが外の景色を伺う。

サムス

「この星ならゆっくり体を休めるわね……………今回の仕事は結構大変だったから少し仮眠を取らないと…………。」

そう言うとサムスは立ち上がり、仮眠室へ向かいパワードスーツを脱ぎ始める……………すると全身青いタイツのようなゼロスーツに覆われた姿と金髪碧眼の美女の素顔が露になる。

サムス

「……………ふう、やはりパワードスーツを着ていると精神的にも疲れるわね。」

サムスはパワードスーツを部屋の隅っこに置き、ベッドへ横になる。

ロボットA

「コレは何ダ？」

ロボットB

「宇宙船ノヨウダ。」

サムスが部屋で仮眠中に二体のロボットがスターシップに近づく。

ロボットA

「中二人ノ気配ヲ確認！ドウスル？」

ロボットB

「怪シイ奴ナラ処分セヨト命令サレタ。」

ロボットA

「了解！船内ノ搜索ヲ開始スル！！」

ロボット達はスターシップへと入って行く。

ロボット達はサムスが仮眠している部屋へ忍び込む。

ロボットA

「コノ宇宙船ノ所有者ト思ワレル女ヲ発見！」

ロボットB

「モシ起キ上ガツテ襲イカカツテキタラ、即処分スレバイイ。」

ロボット達は更に部屋の中を搜索する。

ロボットA

「ン？コレハ……………」

ロボットB

「ドウシタ？」

ロボットA

「コンナ物ヲ見ツケタンダガ……………」

ロボットAはパワードスーツをロボットBまで持ってくる。

ロボットB

「ぱわーどすーつノヨウダ。」

ロボットA

「コレ、ドウスル？」

ロボットB

「取り敢アエズ研究所マデ運ボウ。」

ロボットA

「了解！」

ロボット達はパワードスーツを慎重に運びながら部屋から出てゆく。

サムス

「うゝん……………ムニヤムニヤ……………」

サムスはバウンティ・ハンターの仕事で忙しかったせい、ロボット達の気配に全然気付かず眠ったまま。

サムス

「ふぁゝっ、いけない……………すっかり眠り込んでしまったわ……………」

数分後にサムスが目覚めた。

サムス

「それじゃあ早速出発……………って、あれ？」

サムスは辺りを見渡すと、パワードスーツがなくなっている事に気付く。

サムス

「ま、まさか……………パワードスーツが……………ない!？」

サムスは慌ててスターシップから出ると、道に引きずった後が残っているを発見する。

サムス

「……………何かを引きずった後……………恐らくパワードスーツを盗んだ犯人の物ね……………私とした事が眠ってて部屋に忍び込んだ相手に気付かなかったなんて……………」

サムスは頭を抱える。

サムス

「とにかく、すぐにパワードスーツを取り返さなければ！」

サムスは一旦スターシップに乗ると、護身用の銃・パラライザーを手に取り、再びスターシップから出る。

サムス

（犯人はそう遠くへは行っていないバス！絶対に取り返す！！）

そう思いながらサムスは引きずった後を頼りに駆け出していく。

第六話〜戦艦ハルバードとデデデのブローチ〜（前書き）

この話には星のカービィのキャラが登場しますが、スマブラXに出演していないキャラも出てきますのでご注意ください。

第六話　戦艦ハルバードとデデデのブローチ

ププブランドと呼ばれる場所に二足歩行するハムスター、一回り大きいフクロウ、湖から顔を出すマンボウのような魚、そしてベレー帽を被った少女が楽しそうにお喋りをしていた。

？

「今日も平和だよね。」

？

「リック、平和ボケになるぞ。」

？

「もうなってんじゃないの？」

？

「カインの言う通りかもね。」

リック

「何だよ、クーにアドレーヌまで……。」

？

「…………お取り込み中申し訳ない。」

カイン

「え？」

突然仮面を付けた剣士、メタナイトに声を掛けられる。

クー

「確かお主はメタナイトだな。」

メタナイト

「その通り……………それよりカービイを見なかったか？」

アドレーヌ

「カーくんなら出掛けたけど……………」

メタナイト

「出掛けた？」

リック

「何でもスタジアムに招待されたんだって。」

メタナイト

「そうか……………」

メタナイトは全身にマントを纏いながら去ろうとする。

カイン

「ねえ、カービィに何か用事でもあるの〜?」

メタナイトはその場で立ち止まる。

メタナイト

「……………最近平和で体が鈍っていると思い、カービィに剣の稽古をつけてやろうと思ってな。」

アドレーヌ

「フフ……………貴方らしい。」

メタナイト

「……………それではこれで失礼する。」

リック

「おい、メタナイトも一緒にお喋りしないか?」

メタナイト

「生憎だが、これから私の戦艦ハルバードの点検をしなければなら

ないので…………失礼！」

そう言い残すと、メタナイトはマントを全身に覆うと同時に姿を消してしまう。

カイン

「あゝあ…………行っちゃった。」

クー

「世話しない奴じゃ。」

メタナイトは背中に翼を付けて、戦艦ハルバードがある場所まで飛んでいた。

メタナイト

「そろそろだな……………ん？あれは……………」

メタナイトは地上に何かを発見する。

メタナイト

「……………まさか！！」

メタナイトは驚愕した。何故なら自分の部下、メタナイトのメイスナイト、アックスナイト、トライデントナイト、ジャベリンナイトがフィギュアになって倒れていた。

メタナイト

「お前達！しっかりしろ！！」

メタナイトはすぐに下降し、メタナイトのプレート部分に触り元に戻す。

アックスナイト

「ハッ！？メタナイト様！！」

メタナイト

「一体何があつた？」

トライデントナイト

「そ、それが……。」

メタナイト

「正直に申してみる！」

ジャベリンナイト

「も、申し訳ありません！メタナイト様！！」

メイスナイト

「戦艦ハルバードを狙つてゐる奴にやられたダスッ！！」

メタナイト

「何！？」

アックスナイト

「我々も必死で戦つたのですが、奴の強さは半端ではなくて……。」

メタナイト

「……分かつた！とにかくここは私に任せろ！」

メタナイトはダッシュでハルバードのある場所まで走る。

メタナイト

「ムッ！アイツか！！」

メタナイトは途中でMr.ゲーム&ウオッチを発見する。

メタナイト

「ハアアッ！！」

メタナイトはゲーム&ウオッチに切り掛かるが、ゲーム&ウオッチは間髪を避ける。

メタナイト

「お前が私の仲間を痛めつけた奴だな!？」

ゲーム&ウオッチは首を傾げる。

メタナイト

「しらはつくれるな!!」

メタナイトは再び切り掛かるが……。

ピョーーン!

メタナイト

「なっ!？」

突然二人のレスキュー隊のような平面人間がタンカでゲーム&ウオッチを高く飛ばす。

メタナイト

「コ、コイツら一体何処から!？」

メタナイトの攻撃を避けて、ゲーム&ウオッチは上空から大きな鍵を取り出し、メタナイトに向けて落下する。

メタナイト

「ムッ!!」

バシュッ!!

メタナイトは宝剣・ギャラクシアでゲーム&ウオッチを弾き落とす。

ドスンッ!

ゲーム&ウオッチは尻餅をつき、すぐに起き上がるとフライパンのような物を取り出し、振りかざすと魚や肉といった食材がメタナイトに向かって飛ばしてゆく。

メタナイト

「フッ、こんな攻撃!」

メタナイトはササッと避けてゆく。

メタナイト

「ドリルラッシュ!!」

そう言いながらメタナイトは剣を頭上に構えた状態で横に回転しながらゲーム&ウォッチに突撃する。

ドガッ!!

見事に技はゲーム&ウォッチに命中し、少しふっ飛ぶ。

メタナイト

「どうだ! 大人しく降参しろ!!」

メタナイトはゲーム&ウォッチに剣を突きつける。

?

「てこずっておるようだな……………Mr. ゲーム&ウォッチよ。」

メタナイト

「!?! だ、誰だ!!」

メタナイトは慌てて回りを見渡すと、マスターハンドが半透明の姿で現れた。

メタナイト

「な、何者だ!？」

Mハンド

「私はマスターハンド、亜空軍のボスだ。」

メタナイト

「亜空軍だと？」

Mハンド

「そう、この世界全体を支配する者だ。」

メタナイト

「なっ!?!何を言って……………」

Mハンド

「信じる信じないは自由だが、お前の戦艦ハルバードは我々が頂くぞ。」

メタナイト

「させるか!?!」

メタナイトはマスターハンドに切り掛かるが、透き通ってしまふ。

メタナイト

「ちっ！立体映像か。」

Mハンド

「ゲーム&ウォッチよ！影虫を出してやれ！！」

マスターハンドの言葉通りにゲーム&ウォッチは身体中から影虫を出して、プリムを生み出す。

メタナイト

「こ、これは！？」

Mハンド

「それでは後は頼んだぞ。」

マスターハンドは静かに消えていった。

メタナイト

「くっ！やるしかないか。」

メタナイトはプリムの群れに突っ込む。

その頃、巨大なハンマーを持った自称ププランドの大王、デデデがワドルディ軍団を従えて歩いていた。

デデデ

「今日は絶好の散歩日和だぞい！のおワドルドゥ隊長。」

ワドルドゥ

「まったくです陛下。」

デデデがワドルディ軍団の隊長、ワドルドゥと話していた時に――

匹のワドルディが指をさす。

ワドルドウ

「どうした？……………ん！？陛下！！」

デデデ

「何ぞい？……………あ！あれはメタナイトではないか！！」

デデデはメタナイトが懸命にプリム達と戦っている光景を目撃する。

ワドルドウ

「い、如何いたします？」

デデデ

「勿論、助太刀するぞーい！！」

ワドルドウ

「ハハッ！皆、陛下に続けー！！」

デデデとワドルディ軍団は勢い良く突進していった。

メタナイト

「うりやりやりやりやりやりやー!!」

メタナイトは乱れ切りでプリム達を切り裂く。

メタナイト

「くそっ! 数が多すぎる!!」

デデデ

「メタナイトー!!」

メタナイト

「！？その声は陛下！？」

デデデ

「助太刀しに来たぞーい！！むおっ！？」

メタナイト

「むっ！？」

ドサーーッ！！

ところが、デデデは石につまづいてしまいメタナイトの上にダイブしてしまった。

メタナイト

「お、重い……。」

ワドルドゥ

「へ、陛下！大丈夫ですかー！？」

デデデ

「は、早く起こしてくれー！ー！」

ワドルディ軍団は慌ててデデデを起こそうと持ち上げる、そしてメ
タナイトはデデデの腹の下でもがいていた。

デデデ

「ふうっ、エライ目にあったぞい。」

メタナイト

（それはこっちの台詞だ……。）

メタナイトはデデデの腹から出られた後、デデデと一緒にプリム達
を一掃したのであった。

デデデ

「それにしても、さっきの連中は一体何者ぞい？」

メタナイト

「……………奴らは亜空軍と名乗っていた。」

デデデ

「亜空軍？」

ワドルドゥ

「何ですかそれ？」

メタナイト

「私も詳しくは知らないが、奴らはこの世界を支配しようとしているらしい……………」

デデデ

「な！何じゃと！？」

メタナイト

「それで奴らは私の戦艦ハルバードを奪おうとして……………ハッ！しまった！！」

メタナイトは勢い良く立ち上がるが……………。

ゴゴゴゴゴゴッ！

突然地面が揺れ始める。

デデデ

「じ、地震かぞい！？」

メタナイト

「……………遅かったか。」

ワドルドゥ

「陛下！あれを…………。」

デデデはワドルドゥの指をさした方を見ると、メタナイトの戦艦ハルバードが浮上していた。

デデデ

「な、何事ぞい！？」

メタナイト

「おのれ！よくも私の戦艦ハルバードを！！！」

メタナイトは翼を生やし、何処かへ飛び去るハルバードの後を追って飛んで行った。

デデデ

「これ！どうなっているか説明せんか！！」

ワドルドゥ

「……………行っちゃいましたね。」

デデデ

「うゝむ……………まだよく理解出来てないが、どうやらこの世界に危機が訪れようとしている事は間違いないぞい。」

ワドルドゥ

「これからどう致しましょうか？」

デデデは腕を組みながら深く考え込んでいた。

ワドルドゥ

（あの陛下が考え込んでおられる……。）

デデデ

「そうだ！アレを使うぞい！！」

そう言つとデデデは勢い良く走り出してしまった。

ワドルドゥ

「へ、陛下！？お待ちをー！！」

ワドルディ軍団も慌てて付いてゆく。

デデデ

「うーんと……アレは何処にいったぞい？」

デデデは自分の城の王座の間で何かを探していた。

デデデ

「あ！あつたぞい！！」

そう言いながらデデデは自分の顔のブローチを取り出す。

ワドルドゥ

「陛下、それは何ですか？」

デデデ

「これはわしが開発したブローチぞい。」

ワドルドゥ

「ただのブローチではないのですか？」

デデデ

「このブローチを付けてる者は、フィギュアになっても一定時間経つと元の姿に戻るぞい。」

ワドルドゥ

「そ、そんな凄い物をいつの間に……………」

デデデ

「もしもの為に作っておいたんだぞい。」

ワドルドゥ

「さすが陛下！ところで、そのブローチで何を？」

デデデ

「まずこの一個をわしが付けて……………」

そう言うとデデデは自分の胸部分にブローチを付ける。

ワドルドゥ

「残りの二個は？」

デデデ

「残りは他の奴に付けるぞい。」

ワドルドゥ

「へ！？そ、それは何故ですか？」

デデデ

「わし一人助かってもどうにもならん……………だから後二人にこのブローチを託すぞい。」

ワドルドゥ

「その後二人は誰ですか？」

デデデ

「それを今から探しに行くんだぞい！早速出発するぞい！！」

ワドルドゥ

「へ、陛下！お待ちを……………ワドルディ軍団！デデデ陛下に続けー！！」

デデデが再勢い良く出ていくと、ワドルディ軍団もそれに続いて出ていく。

第六話〈戦艦ハルバードとデデデのブローチ〉（後書き）

以上終了です！メタナイトやデデデの口調はアニメ版のカービィを参考にしました。だから最初ら辺に登場したカービィも「ぽよ」しか喋れません。後リツクやアドレーなど、こういったキャラを他の作品にも出す予定です。

第七話／それぞれの悪事／（前書き）

この話にはスマブラDXのみ登場したあのキャラ達が登場します！
勿論、スマブラXのキャラも登場します。

第七話　それぞれの悪事

その頃、ワリオは森の中でカーゴに乗り回していた。

ワリオ

「いや、本当にこのカーゴって乗り物は便利だよなー。」

ワリオは夢中で運転していた時……。

ワリオ

「ん？あれは……。」

リンゴの木の下でリンゴをかじっている一匹の黄色い小ネズミこと、こねずみポケモン・ピチューを見つける。

ワリオ

「なぐんだ、ちびねずみか………待てよ。」

ワリオはダークキャノンを取り出す。

ワリオ

「そう言えば、まだコイツの威力を試してなかったな……………」

ワリオは怪しい笑みを浮かべた後、ダークキャノンをピチューに向ける。

ワリオ

「ちよっくら試し撃ちでもするか。」

ワリオはダークキャノンの引き金を引くと……………。

ドキュン!!

ピチュー

「ピチュッ!？」

矢印の弾丸がピチューに向かって一直線に飛ぶが、ピチューは反射的に避ける。

ワリオ

「ちっ！外したか……。」

ピチューは森の方へ逃げ出す。

ワリオ

「あ！逃がすか！！」

ワリオはカーゴでピチューを追う。

ピチュー

「ピ……ピチュ……ピチュピ……。」

ピチューは息を切らしながら逃げ回る。

ワリオ

「ガハハハ！この俺様から逃げられると思うなよ！！」

ワリオを乗せたカーゴがピチューに追いつこうとした時……。

ガッ！

ピチュー

「ピッ!？」

ピチューは石に詰まづいて転んでしまった。

ワリオ

「ガハハ!どうやらここまでのようだな!」

ワリオはダークキャノンを担ぎながら、カーゴから降りてピチューに少しずつ近づく。

ピチュー

「ピ……ピチュ……。」

ピチューはブルブル震えて一步も動かない。

ワリオ

「悪いが、コイツでフィギュアになってもらうぜ。」

ワリオは再びピチューに向けてダークキャノンを構えるが……。

？

「やめろ！」

ワリオ

「あ？」

ワリオの背後から低くドスのきいた声が森に響く。

ワリオ

「誰だ？俺様の邪魔をしゃがるのは……。」

？

「私はミュウツー、その子に何をする気だ？」

尻尾を生やした人型の遺伝子ポケモン、ミュウツーはワリオに問いかける。

ワリオ

「お前にゃ関係ないね！それに俺様の邪魔をすんなら……。」

ワリオはミュウツーにダークキャノンを構える。

ワリオ

「お前からコイツの餌食になってもらうぜー！」

ミュウツー

「フン！そんなおもちゃで私を倒すと言っのか？」

ワリオ

「試してみるか？」

ドキュユン！

ワリオはダークキャノンを放つが……。

フッ！

ワリオ

「なっ！消えた！？」

ミュウツーはテレポートしてダークキャノンを避けた。

ワリオ

「くそっ！何処へ行きやがった！！」

ワリオは辺りを見渡すが、何処にもミュウツーの姿が見えない。

ミュウツー

「私ならさっきからここににいるが……。」

ワリオ

「何っ!？」

ワリオは慌てて振り向くと、後ろでミュウツーが立っていた。

ワリオ

「コイツ!いつの間に……。」

ワリオは急いでダークキャノンを構えるが……。

ミュウツー

「ハッ!！」

ワリオ

「うえっ!?!か……体が……動かねえ……。」

ミュウツーは金縛りでワリオの動きを止める。

ミュウツー

「フン!！」

ワリオ

「おわあっ!!」

更にミュウツーは左手を上げると、ワリオを念力で持ち上げる。

ワリオ

「この野郎〜!放しやがれ〜!!」

ミュウツー

「望み通りにしてやる!!」

サッ!

ワリオ

「わあああっ!?!」

ドガアアッ!!

ミュウツーが一気に手を下げると、ワリオは木に勢い良くぶつかる。

ワリオ

「いててて……よくもやりやがったな……。」

ミュウツ―

「これで終わりだ！」

ミュウツ―は巨大な黒い弾を溜めていた。

ワリオ

（ヤ、ヤベエ……………あんなの喰らったら人堪りもねえ。）

ミュウツ―

「喰らえ！！」

バアアアツ！！

ミュウツ―はワリオにダークボールを放つ。

ワリオ

「けっ！みすみす当たってたまるか！！」

ワリオはダークボールを間髪避ける。

ミュウツ―

「ちっ、すばしっこい奴め……………」

ワリオ

「今度は俺様の番だぜ!!」

ミュウツー

「むっ!？」

ワリオはミュウツーに近づくと尻を向ける。

ワリオ

「喰らえ!ワリオっぺ!!」

ブオオオオツ!!

ワリオは強力なオナラをミュウツーにぶちかます。

ミュウツー

「くうっっ!な、何て下品な攻撃なんだ……………」

ミュウツーは堪らなく鼻を抑える。

ワリオ

「ガハハハ！形勢逆転だな！！」

ワリオはつかさずダークキャノンを構える。

ワリオ

「今度こそ喰らえ！！」

ドキュユン！！

ミュウツー

「ぐあっ！！し、しまった……………」

ミュウツーは矢印の弾丸に貫かれると、忽ちフィギュアにされてしまった。

ワリオ

「ガハハハ！このダークキャノンの威力は凄いぜ！！本当に一撃だぜ！」

ワリオは高笑いを上げていると……………。

ガブッ！！

ワリオ

「いてっ！！」

突然ピチューがワリオの右足に噛みつく。

ワリオ

「このチビが！！」

ピチュー

「ピチュッ！！」

ワリオは右足を振り払うと、ピチューはふっ飛ばされてしまった。

ワリオ

「お前もフィギュアにしてやるぜ。」

ドキュyun！！

ピチュー

「ピ……チュ……。」

ピチューは矢印の弾丸に貫かれ、フィギュアと化してしまう。

ワリオ

「ガッハハハハ！俺様に逆らう奴は皆こくなるのだ！！」

そう言っているとワリオはミュウツーとピチューのフィギュアをカゴに
乗せる。

ワリオ

「一気に二つも手に入れたぜ！こりゃあさい先がいいぞ。」

ワリオは上機嫌でその場から去る。

一方クツパとその手下達はベルン王国という国にいた。

？

「化け物！リリーナを離せ！！」

クツパ

「ほう、なかなか威勢のいい小僧だな。」

クツパはリリーナと呼ばれる少女を人質にし、剣士の格好した赤い髪少年ロイと睨み合っていた。

リリーナ

「ロイ！私の事より、この亀をやっつけて！！」

クツパ

「誰が亀じゃ！この小娘が！！」

クツパはリリーナの首を押さえている腕を少し強く絞める。

リリーナ

「うぐっっ！！」

ロイ

「や、やめろ!!」

ロイは封印の剣を抜き、クツパに突っ込む。

クツパ

「フン! たかが小娘一人で熱くなりおつて。」

パチッ!

クツパが指を鳴らすと、クリボーやノコノコといったクツパ軍団がロイの前に立ちはだかる。

ロイ

「くっ! 邪魔するなああつ!!」

ロイは封印の剣でクリボー達を一掃する。

クツパ

「ほう、我輩の手下を蹴散らすとは……………あの小僧なかなかやるな。」

リリーナ

「当たり前でしょ！ロイはエルトリア軍を率いてベルンに立ち向かったのよ！！」

クツパ

「成程………アイツはファイアーとしての素質があるな……。」

クツパは怪しい笑みを浮かべる。

ロイ

「雑魚は片付けた！残りはお前だけだ！！」

クツパ

「………よし、いいだろう！我輩が直々に相手をしてやる！！」

バツ！！

リリーナ

「きゃあっ！！」

クツパはリリーナを腕から離すと、ロイに接近する。

クツパ

「喰らえ！クツパプレス！！」

ゴオオオオツ！！

クツパは口から炎を吐き出す。

ロイ

「くっっ！！」

ロイはとっさに炎から避ける。

ロイ

「うりゃああっ！！！！」

ロイは封印の剣をクツパに向かって振り上げる。

クツパ

「ムッ！！！！」

ガキイン！！

クツパは顔や手足を甲羅に隠し、ロイの攻撃を防ぐ。

ロイ

「何っ！？」

クツパ

「今度はこちらから行くぞ！！」

そう言うときクツパは甲羅を高速回転しながらロイに突っ込む。

ドガアッ！！

ロイ

「ぐわああっ！！」

ロイはクツパの攻撃をまともに喰らい、そのままふっ飛ばされる。

リリーナ

「ロイ！！」

クッパ

「どうした？もう終わりか？」

ロイ

「くっ…………ま…………まだまだ…………。」

ロイはフラフラになりながら立ち上がる。

クッパ

「ほほう、まだ立てるのか……………だが。」

クッパはダークキャノンの構える。

クッパ

「これで終わりだ！」

ドキュユン！！

ロイ

「がつ！？」

矢印の弾丸がロイを貫くと、ロイはフィギュアになってしまった。

リリーナ

「！……………ロ、ロイ！！」

クツパ

「うむ……………確かにこのダークキャノンの威力は凄いな。」

そう言いながらクツパはロイのフィギュアに近づき、片手でフィギュアを持ち上げる。

リリーナ

「ロイを元に戻して！！」

クツパ

「そうはいかん、コイツは我々が頂く。」

次にクツパはパタパタに手招きをする。

クツパ

「パタパタ、コイツを基地まで運んでこい。」

パタパタ

「了解！」

クツパはロイのフィギュアをパタパタに渡すと、何処かへ飛んで行った。

クツパ

「野郎ども！引き上げるぞ！！」

そう叫ぶと、クツパは愛用の飛行船に乗り込んで、飛び去って行く。

リリーナ

「ロイ………そんな………嘘よ………。」

リリーナはその場から崩れ落ち座り込む。

クッパ

「このダークキャノンさえあればマリオなど敵ではないわ！ガッハハハハ……。」

クッパは大笑いしながら、上空を漂う。

クッパ

「ん？ここは……。」

クッパはふと下を見ると、ジャングルに目を奪われる。

クッパ

「確かこのジャングルは……そうだ！！」

クッパはジャングルに向かって下降した。

クツパは地上に着陸するなり、クリボー達に何かを指示していた。

クツパ

「お前達！このジャングルの奥にあるバナナを沢山盗んでくるんだ！」

クリボー

「へ？バナナをですか？」

ノコノコ

「何故バナナを？」

クツパ

「奴を誘き出す餌にするのだ……………」

クリボー

「奴？」

クツパ

「いいから早くバナナを盗んで来い！！」

ノコノコ

「は、はい！！」

クリボー達はカーゴに乗って、ジャングルの奥へと入って行った。

クツパ

「フッフ……………このジャングルは奴の住みかだから……………」

クツパは再び怪しい笑みを浮かべる。

一方このジャングルの奥の木の家で気持ち良さそうに昼寝をしている一匹のゴリラがいた。

？

「Z Z Z 」。」

そのゴリラはこの辺りのジャングルを住み家に行っているドンキーコングである。

？

「ドンキー！大変だよー！！」

突然帽子を被った一匹の小猿がドンキーコングの家に押し掛ける。

ドンキー

「んあ〜？……………何だ、デイディーか……………」

ドンキーはデイディーコングと呼ばれる小猿に起こされる。

デイディー

「呑気に昼寝なんかしてる場合じゃないよ！」

ドンキー

「どうして？」

ドンキーは頭をポリポリかきながら問いかける。

デイディー

「バナナ倉庫にあったバナナが全部盗まれたんだよ！！！」

ドンキー

「な……………何だつて！？」

これには流石にドンキーも驚いた。

ドンキー

「またクレムリン軍の仕業か！？」

デイディー

「いや、何かキノコや亀みたいな奴らだったよ。」

ドンキー

「キノコ？亀？」

ドンキーとデイディーは首を傾げる。

ドンキー

「と、とにかくバナナを取り返さない！」

デイディー

「そうだね！このままじゃクランキーにも怒られちゃうしね。」

ドンキー

「よし！行くぞ、デイディー！！」

デイディー

「あ、待ってよー！ドンキーー！！」

ドンキーは家の扉をぶち破るとジャングルに向かって走り出し、そ

の後をディディーが一生懸命付いて行く。

とある荒廃した動物園で影虫が撒かれ、プリム達が少年を囲んでいた。

？

「な、何だコイツら！？新種のポケモンか？」

彼はポケモントレーナー。ポケモンマスターを目指してポケモンと呼ばれる生物をゲットしたり育てたりしている。

トレーナー

「いけっ！フシギソウ！！」

ポンッ！

フシギソウ

「フッシー！！」

トレーナーがモンスターボールを投げると、ボールの中から背中に蕾を乗せたポケモン、フシギソウが出てくる。

トレーナー

「フシギソウ！つるのムチだ！！」

フシギソウ

「フッシーッ！！」

バチン！バチン！！

フシギソウのムチでプリム達は吹き飛ばされる。

トレーナー

「いいぞ！その調子だ！！」

？

「情けない奴らめ……。」

トレーナー

「！？……だ、誰だ！」

トレーナーは声が出た方を見上げると、緑色のフードを纏ったマスターロボットが浮いていた。

？

「我が名はエインシャント卿。」

トレーナー

「エインシャント卿？」

マスターロボットは自分の名をエインシャント卿と名乗ると、二体のロボットが黒いボールを持って現れる。

トレーナー

「な、何を……。」

ポイツ！

フシギソウ

「フシッ！？」

ビュユッ！！

トレーナー

「なっ！？フシギソウが！！」

ロボットがフシギソウに向かってボールを投げると、フシギソウはボールの中へ引き込まれた。

トレーナー

「い、今のはまさかモンスターボール！？でも人のポケモンをゲットできるモンスターボールなんて……。」

エインシャント卿

「これは我々が開発したブラックボールだ。」

トレーナー

「ブラックボール？」

エインシャント卿

「このボールは野生のポケモンだけでなく、トレーナーにゲットされたポケモンも捕獲出来るのだ。」

トレーナー

「そ、そんな……………フシギソウを返せ!!」

エインシャント卿

「悪いが、それは出来ない相談だな。」

トレーナー

「くっ……………行け!リザードン!!」

ポンッ!

リザードン

「グアアアッ!」

次にトレーナーはモンスターボールからドラゴンのような姿をしたポケモン、リザードンを出す。

トレーナー

「リザードン！アイツからフシギソウを取り返すんだ！！」

リザードン

「グオオオツ！！」

リザードンは空を飛び、浮いているエインシャント卿に向かって突進しようとするが……。

エインシャント卿

「無駄だ。」

ポイツ！

リザードン

「グウウツ！？」

ビュユツ！！

もう一体のロボットが投げたブラックボールがリザードンを引き込

む。

トレーナー

「……しまった！リザードンまで……。」

エインシャント卿

「この二匹は頂いていくぞ。」

そう言うときエインシャント卿と部下のロボット達はその場から飛び去って行く。

トレーナー

「ま、待て……！」

トレーナーは慌てて後を追おうとするが、プリム達によって塞がれる。

トレーナー

「くそっ！邪魔するな……！行け！ゼニガメ……！」

ポンッ！

ゼニガメ

「ゼニーツ！」

最後にトレーナーのモンスターボールから亀の姿をしたポケモン、ゼニガメが出てくる。

トレーナー

「ゼニガメ！一気に片付けるぞ！！」

ゼニガメ

「ゼニゼニ！！」

？

「ピカーッ！ピカピカー！！」

？

「プリプリー！！」

ワリオがミュウツーとピチューをフィギュアにした森で二匹のポケモンが誰かを探していた。

？

「ピカチュ……。」

赤いほつぺにギザギザの尻尾が目立つ黄色いねずみポケモン、ピカチュウは肩を落とす。

プリン

「プリプリ……。」

大きな目に丸い体型の風船ポケモン、プリンがピカチュウをなだめる。

ピカチュウ

「ピカ、ピカピカ!？」

プリン

「プリ……。」

実はピカチュウは弟のピチューがいなくなって心配になり、プリンと一緒にピチューを探しているのである。

ピカチュウ

「ピカーッ!!」

ピカチュウは大きく鳴き声を発する。

ガサガサッ!

プリン

「プリ？」

突然近くの草むらから音が響く。

ピカチュウ

「ピカ〜?」

ピカチュウはゆっくりと草むらに近づく。

ガサッ!!

ピカチュウ

「チャーーッ!?!」

プリン

「プリューー!?!」

すると草むらからロボットが顔を出し、ピカチュウとプリンは驚きのあまり倒れてしまう。

ロボットA

「前方1mに黄色い生物ト風船ミタイナ生物ヲ発見!」

ロボットB

「直ちに捕獲セヨ!」

二体のロボットはピカチュウ達に近づく。

プリン

「プ、プリ……。」

プリンはピカチュウの背中で涙目になり怯えている。

ピカチュウ

「ピ、ピカ！」

だがピカチュウはプリンを守ろうと必死でかばい、頬袋から電気を放つ。

ロボットA

「無駄ナ抵抗ハスルナ。」

ロボットB

「大人シク我々ニ付イテ来ルノダ。」

ロボット達はピカチュウに手を出そうとした時……………。

ピカチュウ

「ピッカーー!!」

バリバリッ!!

ロボットA

「グアアアアッ!!」

ロボットB

「何ッ!？」

ピカチュウはロボットAに電撃を放つと、ロボットAはショートしてしまった。

ロボットB

「ア、アンナニ電気ヲ放ツトハ……。」

ピカチュウ

「ピッカー!!」

ロボットB

「ヒイイツ!!」

ロボットBはピカチュウの威嚇に怯み、再び電撃を放とうとするが……。

？

「やめろ！」

ピカチュウ

「ピカ？」

ピカチュウは声のした方へ見上げると、エインシャント卿がいた。

ロボットB

「ますたー！！！」

エインシャント卿

「よくも私の部下を……………絶対に許さん！！！」

エインシャント卿は怒りを露にすると、バズーカのような武器を構える。

ドンッ！！

ピカチュウ

「ピカッ!？」

エインシャント卿の放ったバズーカから金網が出てきて、ピカチュウを捕らえる。

エインシャント卿

「コイツを研究所まで連れて行け。」

ロボットB

「了解!」

ロボットBはピカチュウが入った金網を引っ張る。

ピカチュウ

「ピーカ、チュウウウッ!」

バリバリバリッ!!

ピカチュウは電撃を放電するが、金網はビクともしない。

エインシャント卿

「無駄だ、その金網は電気を通さない特注品だ。」

ピカチュウ

「ピカピ！？」

ピカチュウが驚く中、ロボットBは金網を引っ張る。

プリン

「プリンッ！！」

プリンはロボットBに突っ込むが……。

ロボットB

「邪魔ダ！」

バシッ！！

プリン

「プリンッ！！」

ロボットBがプリンを叩き飛ばす。

エインシャント卿

「さて、私はそろそろ任務に取り掛かるか。」

ロボットB

「ますたー、本当ニヤルノデスカ？」

エインシャント卿

「当然だ……お前達の為にな……。」

ロボットB

「ますたー……。」

そしてエインシャント卿とロボットBはその場から去って行く。

？

「何て酷い事を……。」

プリンの近くに獣人のような姿をした波導ポケモン、ルカリオが現れる。

ルカリオ

「……………気絶しているだけのようだな。」

ルカリオはプリンの額に手を置くと、気絶しているだけだと確認する。

ルカリオ

「それにしても、奴らは一体何者だ？……………少し奴らについて調べてみるか……………」

そう言い残すと、ルカリオは何処かへ飛び去ってしまふ。

第七話ゝそれぞれの悪事ゝ（後書き）

前書きにも書いたようにスマブラDXのロイ、ミュウツー、ピチユ
ーを登場させました。尚ドクターマリオと子供リンクは登場させま
せんでした。ファンの方はすいません……。後エインシャント卿が
使ったブラックボールはポケモンの映画・ミュウツーの逆襲に出て
きたあのボールを元にしました。今回の話は如何でしたか？

第八話　異変に気づきしファイター達（前書き）

はつきり言ってこれから登場するキャラの口調にあまり自信がありません……もし違和感がありましたら遠慮なく指摘を！

第八話　異変に気づきしファイター達

CALL　CALL

亜空軍に奪われた戦艦ハルバード内部の倉庫らしき部屋にポツンと置いてあるダンボールの中からコール音が響く。

？

「こちらスネーク、応答せよ。」

ダンボールに入っている人物はソリッド・スネーク、核兵器メタルギアから何度も世界を救った伝説の傭兵と呼ばれてる男である。

？

「おおスネーク！全然連絡が音沙汰だったから心配したぞ。」

そう答えたのはスネークの上官で親友でもあるロイ・キャンベル大在である。

スネーク

「すまないな大在、何しろ偵察任務中だったものでな。」

大在

「偵察？一体何の？」

スネーク

「さっき空飛ぶ巨大戦艦から変な黒い物体をバラ撒いて、そこから変な怪物が湧き出てきたのを偶然目撃して……俺はサイファーを使って何とかこの戦艦に侵入する事に成功した。」

大在

「おいおい、随分無茶な事を……。」

？

「スネーク！その巨大戦艦の先端に仮面みたいな物が付いていなかったかい！？」

途中で会話に割り込みスネークに質問するのは、兵器開発の天才で日本アニメ好きのハル・エメリッヒこと通称オタコンだった。

スネーク

「あ？ああ………確か付いていたな。」

オタコン

「やっぱり………それはハルバードという名前の戦艦だ。」

スネーク

「知ってるのか？オタコン。」

オタコン

「戦艦ハルバードは二連主砲、ヘビーロブスター、リアクターなど様々な兵器が搭載されている戦艦さ……その戦艦の所有者はメタ・ナイツのリーダー、メタナイトという仮面の剣士だよ。」

スネーク

「じゃあ、そのメタナイトって奴がこんな騒動を起こしているのか？」

？

「でも彼はこんな事をする人物ではないって噂よ。」

そう答えるのは、通信データ処理担当のオペレーター、メイ・リンである。

スネーク

「じゃあ誰かがこの戦艦を乗っ取って悪さを働いてるって事か？」

メイ・リン

「そういつ可能性も無くは無いわ。」

スネーク

「だが今の段階では何とも言えん……とにかく俺はこのまま戦艦の偵察を続よつと思う。」

大在

「くれぐれも無茶はするなよ。」

スネーク

「了解だ大在！任務を続行する！！」

プツン！

スネーク

（……………取り敢えず、しばらくはここで待機するか……………。）

とある上空に巨大な宇宙空母・グレートフォックスが浮上していた。

？

「ペッピー、仕事の依頼がきたって本当か？」

このグレートフォックスを拠点としている、雇われ遊撃隊・スターフォックスのリーダー、フォックス・マクラウドがメンバーの古株のペッピー・ヘアに問いかける。

ペッピー

「そうじゃ、たった今コーネリア防衛軍から依頼がきたぞい。」

フォックス

「それで内容は？」

ペッピー

「今各地で被害を及ぼしている巨大戦艦を阻止してほしいとの事じゃ。」

フォックス

「巨大戦艦？」

ペッピー

「何でもその戦艦はハッチから黒い物体をまき散らし、そこから怪物を生み出して悪さを働いているという情報じゃ。」

フォックス

「成程……よし！早速アーウィンで追跡してくる！！」

ペッピー

「待てフォックス！一人で行くのは危険じゃ！！誰かフォックスと一緒に……。」

？

「ごめん、オイラ今から別の任務があるんだ。」

そう答えるのは、同じくスターフォックスのメンバーでメカが得意なスリッピー・トード。

ペッピー

「何じゃと！？」

？

「じ、実は私も別の任務があるの……。」

次に答えたのは、フォックスの恋人でメンバーのクリスタル。

フォックス

「クリスタル、君もか……。」

ペッピー

「じ、じゃあファルコはどうじゃ？」

スリッピー

「ファルコなら今用事で出払ってるよ。」

ペッピー

「うゝゝむ……弱ったのう……こうなったらワシが……。」

フォックス

「いや！俺一人で行く！！」

スリッピー

「えっ！？」

クリスタル

「何ですって!?!」

ペッピー

「何を言っておる!?!いくら何でも危険すぎる!?!」

フォックス

「でも、こうしてる間にも被害はどんどん増えていくんだろ!?!だつたら俺だけでも行くしかないだろ!?!」

クリスタル

「フォックス……。」

スリッピー

「……何かカッコいい。」

ペッピー

「まったく……お前も段々、親父に似てきたな……。」

フォックス

「………それじゃあ、行つて来る!」

フォックスがアーウィンがある場所へ向かおうとした時……。

クリスタル

「フォックス！」

クリスタルに呼び止められフォックスは一時止まる。

クリスタル

「気をつけてね。」

フォックス

「ああ！大丈夫！！！」

フォックスは笑顔で答えると、再び走り出しアーウィンに乗り込み出発する。

スリッピー

「頑張れフォックス！！！」

ペッピー

「うゝゝむ……………フォックス一人じゃ心配じゃなあ……………やはりワシが……………」

スリッピー

「年寄りは引っ込んでろよ！」

？

「おい、今帰ったぞ。」

その時、メンバーのファルコ・ランバルディが帰って来た。

クリスタル

「あら、おかえりなさい。」

ペッピー

「おおファルコ！丁度良い所に……………」

ファルコ

「何だ？俺に何か用か？」

スリッピー

「実はさっきフォックスが……………」

スリッピーはファルコに粗方説明した。

ファルコ

「成程なあ……………　　ったくフォックスの奴、カッコつけやがって。」

ペツピー

「そうゆう訳でファルコもフォックスと一緒に例の戦艦を追ってくれんかのう。」

ファルコ

「分かってるって、フォックス一人じゃ任せられねえからな。」

クリスタル

「相変わらずね……………」

スリッピー

「それじゃあファルコ、気をつけてね〜！」

ファルコ

「おう！それじゃ行って来るぜ！！」

ファルコは勢い良く出ていき、アーウィンに乗り込み出発する。

クリスタル

「二人共、大丈夫かしら……。」

スリッピ

「あの二人なら大丈夫だよ！」

ペッピ

「頼むぞ……ファルコ……フォックス。」

そんな中で戦艦ハルバードは更に影虫をバラ撒いていた。

？

「ひいゝゝっ！何なのコイツらゝ！？」

？

「さあな、キマイラではない事は確かだ！」

？

「二人共！お喋りなんかしてる場合じゃないよ！！」

？

「ワンワン！」

タツマイリ村と呼ばれる小さな村に影虫が撒かれてプリム達が出現

し、寝癖が目立つ金髪の少年リユカ、赤い髪の少女クマトラ、茶髪の青年ダスター、犬のボニーに襲いかかる。

クマトラ

「PKサンダー!!」

バリバリバリッ!!

クマトラの放ったPKサンダーがプリム達を一掃する。

ダスター

「喰らえ!!」

ダスターはドロボーグッズでプリム達の動きを封じる。

ダスター

「そりゃっ!!」

更にダスターは足技でプリム達をなぎ払う。

?

「リユカ!怖がってないでお前も早く戦え!!」

リュカの肩からヒモヘビが顔を出す。

リュカ

「わ、分かってるよ……………PKフラッシュー！」

パアアアツー！

リュカの放ったPKフラッシュでプリム達がふっ飛ぶ。

ダスター

「いいぞリュカ！その調子だー！」

リュカ

「う……………うん！」

数分経ってもプリム達の数は一向に減らない。

ダスター

「くそっ！幾ら何でも数が多すぎるー！」

クマトラ

「ああ…………俺のPSIも限界に近い…………。」

リュカ

「ど、どうしよう…………。」

慌てふためいているリュカを見つめるクマトラがダスターに近づく。

クマトラ

「ダスター。」

ダスター

「何だ？」

二人はリュカに聞こえないように耳元で話をする。

クマトラ

「……とゆう訳でいいか？」

ダスター

「……分かった！」

リュカ

「ね、ねえ……二人で何を話してるの？」

リュカが不安がる中、クマトラはリュカに近づく。

クマトラ

「リュカ、お前だけレポートで逃げろ。」

リュカ

「え！？み、みんなは？」

ダスター

「俺達はコイツらを片付けてから行く。」

リュカ

「そんな…………嫌だよ！みんなと離れるなんて…………。」

クマトラ

「大丈夫だって！後で必ず会えるから！！」

リュカ

「ほ、本当に…………？」

ダスター

「ああ！約束する！！」

リュカ

「……………分かった！」

ダスター

「ヒモヘビ、リュカの事頼んだぞ！」

ヒモヘビ

「お、おう！任せとけ！！」

クマトラ

「じゃあな……無事でいろよ……。」

ボニー

「ワンワン!!」

フツ!!

リュカはテレポートでその場から消えていった。

(……………助けて。)

？

「!?!?!?!?!誰!?!」

オネットと呼ばれる町で赤い帽子を被った少年、ネスが誰かに呼ばれた事に気付く。

？

「どうしたの?ネス。」

ピンクの服に赤いリボンをつけた少女ポーラがネスの異変に気付く。

ネス

「いや……………誰か僕を呼ばなかった?」

？

「いいや、誰も…………。」

？

「気のせいじゃないのか？」

黄緑色の服に眼鏡を掛けた少年ジェフと白い道着に弁髪の少年プーは呼んでいないと言う。

ネス

「変だな……確かに誰かが……。」

（誰か助けて……。）

ネス

「！……やっぱり聞こえる！」

ポーラ

「ネ、ネス？」

ネス

「僕、ちょっと行って来る！」

ジェフ

「行くなって何処へ！？」

ネス

「僕もよく分からないけど……………とにかく声のする方まで！」

プー

「お、おい！ネスー！！」

ネスは何処かへ走り出してしまった。

プー

「行っちゃった。」

ジェフ

「急にどうしたんだろう？」

ポーラ

「きつとネスは何かを感じ取ったんじゃないかしら？」

ジェフ

「感じ取ったって……………テレパシーとか？」

プー

「でも、それなら何で俺やポーラは何も感じなかったんだ？」

ポーラ

「私にも分からないわ。」

ジェフ

「それで、これからどうする？」

プー

「取り敢えず少しネスを待つか。」

ポーラ

「そうね……ネスに任せましょ。」

？

「ファルコン！今日のレースで決着を着けてやるぜ！！」

？

「フン、それはこっちの台詞だ！」

ここミュートシティで今まさにレースが始まろうとしている。そして凄腕のバウンティ・ハンターのキャプテン・ファルコンと盗賊のサムライ・ゴローは自分のマシンでレース場へ向かうが……………。

ファルコン
「こ、これは!？」

二人はレース場を見て驚いた。何故ならレース場は巨大な亜空間に覆われていたからである。

ゴロー
「何々だ!？あのデカくて黒いモンは……。」

ファルコン
「俺にも分かん、一体何が何だか……。」

？
「ファルコン!」

ファルコン
「ん？スチュワートにジヨディか……。」

ファルコンに声を掛けたのは、元医者 доктор・スチュワートと銀河宇宙連邦のジョディ・サマーである。

ファルコン

「一体何があったのか教えてくれないか？」

スチュワート

「実はファルコン達が到着する3分前、レース場に全身緑色のロボに被われた奴が現れてね……………」

ジョディ

「そいつは巨大な爆弾のような物をぶら下げていたわ。」

ファルコン

「爆弾!?!」

スチュワート

「そう……………そして奴はその爆弾を降ろすと、二体のロボットが現れて爆弾を起動させたんだ……………」

ジョディ

「私達はどうかレース場から離れられたけど……………恐らく何人か

はあの黒い物体に飲み込まれたと思うわ……。」

ファルコン

「そんな事が……。」

ファルコンは拳を握る力を強める。

ファルコン

「それでその爆弾を仕掛けた奴は何処に!？」

スチュワート

「確か西の方角へ飛んで行ったよ。」

ファルコン

「そうか、よし……。」

ファルコンは急いでブルーファルコンに乗り込む。

コロー

「おいファルコン! 何処へ行く!？」

ファルコン

「爆弾を仕掛けた奴を追いかける。」

スチュワート

「何だって!？」

ジヨディ

「貴方一人じゃ危険よ!」

ファルコン

「俺なら大丈夫だ。それに…………俺はこんな事をした奴を許せない!」

ジヨディ

「ファルコン…………。」

ゴロー

「フン! カッコつけやがって。」

スチュワート

「気をつけるよ、ファルコン…………。」

ファルコン

「ああ、分かってる!」

そう言い残すと、ファルコンはブルーファルコンを発進させる。

？

「マルス、大変よ！」

？

「どうしたんだい？ シーダ。」

タリス王国の城で王女シーダがアリティア王国の王子マルスに質問する。

シーダ

「東の方角に廃虚になった砦があるでしょ？」

マルス

「ああ、確か3年前に彼処で戦争が起こって、今は無人になったっていうあの砦の事？」

シーダ

「そうよ。」

マルス

「彼処がどうかしたの？」

マルスがそう言うと、シーダはマルスの耳元に近づく。

シーダ

「実はあの砦に、最近何者かがうろついているって噂を聞いたのよ。」

「

マルス

「本当に!？」

シーダ

「それにその者達は人間じゃないって……。」

マルス

「え!?! どうゆう事？」

シーダ

「何でも黒い物体が一ヶ所に集まって、そこから怪物が湧き出てきたって近くの町の人達が言ってるわ。」

マルス

「怪物……。」

マルスは腕を組んで、深く考え込む。

シーダ

「マルスはどう思う?。」

マルス

「うーん……少し信じがたいけど、もし噂が本当なら放っておけないな……。」

シーダ

「じゃあ……。」

マルス

「丁度その皆の近くの町に用事があるから、ついでに様子を見よう
と思ってね。」

シーダ

「そうなの？なら私も一緒に……あっ！！」

マルス

「どうしたの？」

シーダ

「わ、私……今からタリスの町の方に大事な用事がある事をすっかり忘れてたわ……。」

マルス

「フフツ……いいよ、僕一人で大丈夫だよ。」

シーダ

「で、でも……。」

マルス

「心配いらないよ！それじゃあ早速……。」

マルスは神剣フォルシオンを持ち出し、出発の準備を始める。

マルス

「それじゃあ、行ってくる！」

シーダ

「マルス、気をつけてね。」

マルス

「ああ！行ってきますー！！」

マルスは東の砦へと向かう。

？

「とっつ！せりゃっ！！」

クリミア王国と呼ばれる国の一地方にグレイル傭兵団団長のアイクが剣の稽古をしていた。

アイク

「ふう、今日はこの辺にしとくか……。」

？

「お兄ちゃん！」

アイク

「ん？ミストか。」

アイクの妹ミストが慌ててアイクに近づく。

アイク

「そんなに慌ててどうしたんだ？」

ミスト

「と、とにかく町の方まで一緒に来て！」

アイク

「お、おいっ！？」

ミストはアイクの手を引っ張りながら走る。

アイク

「こ、これは!？」

アイクが目に入っしたのは、クリミアの城が亜空間に飲み込まれてプリム達が次々と町の方へと向かっている光景だった。

アイク

「あの黒い物は一体………それにコイツら、ラグズではないな。」

？

「あ！アイクさんにミストさん!！」

ミスト

「エリンシア女王!!」

アイク達の前にペガサスに乗ったクリミア王国の女王エリンシアが駆けつける。

アイク

「これは一体……。」

エリンシア

「私もよく分かりませんわ……急にあのような黒い物体や変な生き物が現れて……。」

アイク

「そうですか……ムッ!？」

ミスト

「どうしたの?お兄ちゃん。」

アイクは亜空間の近くにエインシャント卿を発見した。

アイク

「あれは……。」

エリンシア

「ああ！あの者は確か、黒い物体の近くにいた……。」

アイク

「！……………まさかアイツが？」

しばらく見てみると、エインシャント卿は何処かへ飛んで行く。

アイク

「……………逃がすか！！」

アイクはエインシャント卿に向かって走り出そうとする。

ミスト

「お、お兄ちゃん！？」

アイク

「ミスト！今すぐに傭兵団の皆をここへ呼んで、あの生き物を追い払うんだ！！」

ミスト

「え！？お兄ちゃんは？」

アイク

「俺は奴を追う！！」

そう言い残すと、アイクは走り出してしまった。

ミスト

「行っちゃった……。」

エリンシア

「ここはアイクさんに任せて、私達であの生き物達をぶっとばして差上げましょう！」

ミスト

「は、はい！」

ミストはグレイル傭兵団を呼びに走り出す。

こうして亜空軍は次々と悪事を働き、この世界は亜空間に飲み込まれつつある事をファイター達は少しずつ分かり始める……。

第八話　異変に気づきしファイター達（後書き）

如何でしたか？みんなプレイした事ないゲームばかりなもので……。でも頑張って書きました！感想待ってます！！

最終回く亜空間を迷う者く（前書き）

この序章編もこの話で最終回です。因みにこの話には残りのファイターが登場します。分かりますか？

最終回く亜空間をさ迷う者く

このグリーンヒルゾーンと呼ばれる場所でも止まらぬ速さで走る者がいた。

？

「へい！今日も絶好調だぜ！！」

彼の名はソニック・ザ・ヘッジホッグ。常に走るのが好きで、曲がった事と退屈な事が嫌いなハリネズミである。

ソニック

「何か面白い事はないかな？」

？

「ソニックー！」

ソニック

「ホワイ？」

ソニックを呼ぶのは、二本の尻尾を持つキツネのアイルス・パウワ
ーことテイルスである。

ソニック

「ヘイ、テイルス！そんなに慌ててどうした？」

テイルス

「と、とにかくあれを見て！！」

ソニック

「あれって？」

ソニックはテイルスの指をさす方を見る。

ソニック

「！？……………ありや何だ？」

空一面が赤くなると同時に、戦艦ハルバードが通り過ぎる。

テイルス

「……………何か不気味な戦艦だね……………」

ソニック

「……………こりゃあ、何かあるな……………」

ソニックは少しの間、考えているとすぐに走り出す。

ティルス

「ど、何処へ行くの！？ソニックー！」

ソニック

「あの戦艦の後を追っかけるのさ！いい退屈しのぎになるしな！」

ティルス

「あまり無茶しないでねー！！」

ソニック

「ノープロブレム！大丈夫だって！」

ソニックはまるで丸い球体のように速く走り出して行った。

ティルス

「行っちゃった……。」

ソニック

「それにしてもあの戦艦、一体何処へ行くつもりだ？」

あれから一時間位経っても、ソニックはまだ戦艦ハルバードを追っかけていた。

ソニック

「ん！？誰か倒れてるぞ！！」

ソニックは浜辺で緑色の服と帽子を被ってる少年が打ち上げられて

いた。

ソニック

「おい！しっかりしろ！！」

ソニックは戦艦ハルバードを追いかけるのをやめて、少年に近づき軽く揺さぶる。

？

「う、うん……。」

少年は猫のような大きな目をゆっくり開ける。

ソニック

「オウ！気がついたかい？」

？

「あれ？ここは……。」

ソニック

「お前はここ浜辺で倒れてたんだぜ。」

？

「え？……あ！そう言えば……それより君は？」

ソニック

「俺か？俺はソニック・ザ・ヘッジホッグ。ソニックって呼んでくれ！」

？

「ソニック……さん？」

ソニック

「お前の名前は？」

？

「ぼ、僕は……リンクって言います。」

ソニック

「リンクか……宜しくなリンク！」

リンク

「あ……宜しく。」

ソニックはリンク（トゥーンリンク）と名乗る少年と握手を交わす。

ソニック

「ところで、何でこんな所で倒れてたんだい？」

トリック

「じ、実は……。」

Tリンク

「テトラ、何処まで行くの？」

テトラ

「さあな、風のままに進むだけさ。」

トウーリンクは少女テトラが率いる海賊団と共に航海の旅を続けていた。

Tリンク

「ハアッ……おばあちゃんとア ril ……元気にしてるかな。」

「

テトラ

「何だリンク、ホームシックにでもなったかい？」

Tリンク

「い、いや……そういう訳じゃ……。」「

海賊A

「おい！何だありゃ！？」「

テトラ

「ん？」

トリंक

「あ、あれは！？」

海賊Aの声でテトラとトゥーリンクは上空を見ると、戦艦ハルバードが浮上していた。

テトラ

「な、何だ！？あの大きな船みたいな物は……………」

トリंक

「ヴァルー様より大きいかな？」

するとハルバードのハッチが開かれ、影虫が海賊船に撒かれて一ヶ所に集まり、プリムとなる。

海賊B

「な、何だコイツらは！？」

海賊C

「ば、化物だ!!」

テトラ

「みんな、落ち着きな!一斉にかかれば大丈夫さ!!」

海賊D

「そ、そっだ!姉御の言う通りだ!!」

海賊E

「みんなでかかれば怖くない!!」

海賊達は武器を構える。

テトラ

「リンク!あたい達も行くよ!!」

Tリンク

「う、うん!!」

トウーNリンクもマスターソードを構える。

Ｔリンク

「とうっ！てやっ！！」

トウーンリンクは見張り台の上でプリム達と戦っていた。

テトラ

「リンク！そっちは大丈夫かい！？」

Ｔリンク

「う、うん……………なんとか……………うわっ！？」

テトラ

「リンク！！」

トウーンリンクは見張り台から足を滑らせて落下する。

ズボッ!!

トウーンリンクは大砲にハマってしまった。

ボッ!!

全身が真っ赤なプリム、ファイアプリムが口から火を吐き、大砲の導火線に火をつける。

リンク

「え!? ちょ、ちょっと……………」

ドッカーン!!

リンク

「うわあああっ!!」

テトラ

「リンクーッ!」

トゥーンリンクは大砲で水平線の彼方へとぶっ飛んでいった。

トリック

「……………と言う訳なんですよ。」

ソニック

「成程、それは災難だったな……………」

トリック

「それにしても、あの巨大な船みたいなのは何だったんだろ？」

ソニック

「実は俺もその戦艦を追っかけてたんだ。」

トリック

「え？どうして？」

ソニック

「退屈だったから、暇つぶしに丁度良いと思ってな。」

トリック

「ひ、暇つぶし……………ですか……………」

ソニック

「俺は退屈な事が嫌いだね……………そんな時にあの戦艦を発見したの

さ。」

Ｔリンク

「そうなんだ……………それより、みんなどうしてるかな……………」

ソニック

「……………なあリンク、ちょっと俺に付き合ってくれないか？」

Ｔリンク

「え？付き合って……………」

ソニック

「そのかわり、俺に付き合ってくれたらお前の仲間を探すのを手伝ってやるぜ！」

Ｔリンク

「ほ、本当に！？」

ソニック

「イエス！本当さ！」

Ｔリンク

「分かった！……………でも一体何を付き合つの？」

ソニック

「勿論、あの戦艦を追っかけるのさ!」

トリック

「ええっ!?! どうしてそこまで」

ソニック

「いや、何となく臭うんだよ……怪しい匂いをな。」

トリック

「は、はあ……」

ソニック

「そんじゃ、早速行こうぜ!」

そう言うとソニックはダッシュで走る。

トリック

「あっ! 待ってよ!」

ソニック

「ほらほら！モタモタしていると置いてくぜ！！」

ソニックとトゥーンリンクは今、森の中をさ迷っていた。

Ｔリンク

「ねえ、」じじど」じじ」

ソニック

「さあな。」

Ｔリンク

「さ、さあつて……。」

ソニック

「戦艦を探している内に迷っちゃったみたいだ。」

Ｔリンク

「そんな……。」

グニャッ！

Ｔリンク

「わっ！？何か踏んだー！！」

ソニック

「どうしたー！？」

トゥーンリンクは恐る恐る足元を覗くと、ピンク色の丸い物を踏んづけていた。

？

「プリユッ！！」

するとピンクの丸い物は驚いて飛び跳ねる。

Ｔリンク

「うわあっ！しかも動いた！！」

ソニック

「何だこりゃ？」

ソニックはピンクの丸い物を掴み上げる。

？

「プリプリッ！！」

それは風船ポケモンのプリンだった。

Ｔリンク

「こんな生物見た事ない……………」

ソニック

「お前、何て名前だ？」

プリン

「プリ、プリプリン！」

ソニック

「……………何だって？」

Ｔリンク

「……………よく分からないけど、プリンって名前なのかな？」

プリン

「プリ！プリプリッ！！」

プリンは喜んで飛び跳ねる。

ソニック

「どつやら正解らしいな。」

トリック

「プリンか……さっきはごめんね、プリン。」

プリン

「プリプリン。」

それを聞くとプリンは切株の上に乗り、マイクを取り出す。

ソニック

「何だ？歌うのか？」

プリン

「プリッ！」

トリック

「わっっ、楽しみだな。」

プリン

「……………プ〜プルプ〜プリプ〜プリン、プ〜プルプ〜プリプ……………」

トリック

「な、なんて美しい歌声なんだ……………」

ソニック

「グレイト！まさに心に響く歌声だぜ。」

こうしてプリンのコンサートは二時間続いた。

そして二時間後……。

プリン

「……………プリ？」

プリンが歌い終わると、ソニックとトゥーンリンクがいつの間にか気持ち良さそうに眠っているのに気づく。

プリン

「プリユツ！！」

プリンは体を風船のように膨らませて、マイクの先を外すとマジックペンでソニックとトゥーンリンクの顔に落書きを始める。

しばらくすると、ソニックとトゥーンリンクは目を覚ます。

ソニック

「ふあゝっ……………よく寝た……………」

Tリンク

「……………って僕達いつの間に眠ってたんだろう?」

ソニック

「プッ!リンク、何だよその顔……………」

Tリンク

「え?……………そっいつソニックだって……………」

二人の顔には落書きがされており、お互いの顔を見るなり笑い始める。

ソニック

「ところで、プリンは？」

トリック

「あ！………彼処だ。」

プリンは湖の畔でふてくされていた。

ソニック

「ヘイ、プリン！どうしたんだい？」

プリン

「プリュ！」

プリンはソニックから視線を避ける。

トリック

「………もしかして、僕達が歌の途中で眠っちゃったから怒ってるのかな？」

ソニック

「イエス！きつとそれだ。」

「リンク

「ごめんねプリン……………君の歌を聞いてたら気持ちよくなって……………」

ソニック

「アイムソーリー！この通り許してくれ。」

プリン

「プリン……………」

「プリンは少しだけソニックとトゥーンリンクに視線をやるつとした時……………」

ドオオオオン！！

プリン

「プリュッ！？」

ソニック

「な、何だ！？」

トリック

「！！！！！！！！！！あれが落ちてきたんだ！！」

トウーソリンクの言う通り、ソニック達がいる湖の近くに一機の戦闘機が炎を上げていた。

ソニック

「ん？中に誰がいるぞ！？」

「リンク

「えっ!?!」

ソニック

「早く助け出さないと爆発しちゃう!?!」

そう言うソニックは燃えている戦闘機に向かって走る。

「リンク

「ソニックさん!?!」

プリン

「プリッ!?!」

しばらくすると、ソニックが狼のような男を担いで出てきた。

ソニック

「ふう……………危なかったぜ!」

「リンク

「凄い……………あの炎の中に飛び込むなんて。」

プリン
「プリプリン！」

プリンはソニックに向かって拍手をするが、手と手が当たっていない。

ソニック

「そんな事より、早くこの狼を手当てしよっぜ！」

トリック

「そ、そっだね……っ て僕薬持っ てないや。」

プリン

「プリッ！」

ソニック

「ん？これは？」

プリンが木の実のような物をソニックに差し出す。

トリック

「それを使えっ て言っ てるのかな？」

プリン

「プリ、プリン！」

プリンはまた喜びながら飛び跳ねる。

ソニック

「また正解のようだな。」

トリック

「とにかく、それを使ってみよう！」

ソニック

「オーケー！」

ソニック達は狼の男の手当てを終えて、安静に寝かせて様子を見た。

「リンク

「この人、どうして空から落ちてきたんだろう?」

ソニック

「さあな、目が覚めたら聞いてみるか。」

プリン

「プリッ。」

?

「ううっ……………」

すると狼の男がゆっくりと目を開ける。

「リンク

「あ！起きた！！」

「ソニック

「ヘイ！大丈夫か！？」

？

「！！？……………な、何だお前らは！？」

突然狼の男は起き上がると同時に身構える。

「ソニック

「おいおい、助けてやったのにそんなに警戒するなよ。」

「リンク

「ぼ、僕達……………貴方を助けた者です……………」

「プリン

「プリプリッ。」

？

「助けた？このウルフ様を？」

そう、彼はならず者集団スターウルフのリーダー・ウルフであった。

ソニック

「そうさ、もうちょっとで爆発に巻き込まれるところだったんだぜ！」

Tリンク

「あの………もしかしたら、何があったか話してくれませんか？」

プリン

「プリプリン！」

そう言われるとウルフは、その場で腰を降ろす。

ウルフ

「……………別に隠したってしょうがねえしな……………話してやる。」

とある上空で戦艦ハルバードが浮遊していた時、三機の戦闘機が近づいてくる。

ウルフ

「フツ！俺達スターウルフの縄張りに入り込むなんて、大した度胸じゃねえか。」

？

「度胸と言うより無謀と言うべきでは？」

？

「ともかく、あの巨大な戦艦を粉々にしてくれるわ！」

ウルフ

「よし、行くぞ！パンサー！！レオン！！」

ウルフの合図と共に、スターウルフのメンバー、パンサー・カルロツソとレオン・ポワルスキーの操る戦闘機がハルバードに接近する。

ババババババン！！

するとハルバードの連射大砲がスターウルフの戦闘機を狙い打つが、ウルフ達は難なく避ける。

ウルフ

「へっ！そう簡単に当たってたまるか！！」

レオン

「そのでかい図体をバラバラにしてやる！」

スターウルフの戦闘機も攻撃をするが、戦艦ハルバードはビクともしない。

ウルフ

「ちっ！なんて頑丈にできてんだ！」

パンサー

「こりゃあ一筋縄じゃ、いかないな。」

それでもスターウルフはハルバードに攻撃を仕掛ける。

ウルフ

「くそっ！これじゃあ、避けるのが精一杯だ。」

パンサー

「ウルフ！危ない！！」

ウルフ

「何っ！？」

ドガッ！！

突然ウルフの戦闘機、ウルフエンに向かってロボットアームが激突する。

ウルフ

「し、しまった!！」

ウルフエンはどんどん下降していく。

パンサー

「ウルフ!！」

レオン

「パンサー!このままでは我々もやられてしまう……………一時退却だ!」

パンサー

「くっ!止む得ないか……………」

パンサーとレオンの戦闘機はハルバードから離れていく。

ウルフ

「…………お陰でこの様だ。」

プリン

「プリ…………。」

トリンク

「そうだったんですか……………」

ウルフ

「笑っちゃうよな……………スターウルフのリーダーの俺が一撃でやられちまうなんて情けねえ。」

ソニック

「そんなに思い詰めるなよ。」

ウルフ

「同情なんかいらねえ！虚しくなるだけだ！！」

Tリンク

「同情なんてそんな……………」

プリン

「プリプリ。」

ソニック

「……………なあウルフ、俺達もあの戦艦を追ってるんだ……………もし良かったら俺達と一緒に戦艦を探さないか？」

ウルフ

「何だと？」

ウルフはソニックの言葉に耳を疑った。

ウルフ

「ハッ！冗談じゃねえ！何で俺様がお前らのような弱者共と一緒に
ならなきゃいけないんだ！？」

プリン

「プリッ……………」

プリンは悲しい表情でウルフを見つめる。

ウルフ

「……………と言いたところだが、お前らには借りがあるからな……
……今回は特別に組んでやってもいいぜ。」

Tリンク

「ウルフさん！！」

ソニック

「決まりだな！」

プリン

「プリプリッ！！」

プリンは笑顔でウルフの足に抱きつく。

ウルフ

「お、おい！離れる！！」

ウルフは足にくっついていてプリンを振り払おうとするが、全然離れようとしなない。

ソニック

「すっかり気に入ったみたいだな。」

Tリンク

「そうだね。」

プリン

「プリッ。」

ウルフ

「ケッ！勝手にしろ！！」

こうして彼らは戦艦ハルバードを追いかける為に行動を共にする事となった。

そして翌日、ソニック達は森を出て道を頼りに歩いていた。

Ｔリンク

「……………あの戦艦は何処へ行つたんだろ？」

プリン

「プリ……………」

ソニック

「あんなに大きいから、目につくハズだが……………」

ウルフ

「恐らく上空に潜んでいるのかもな。」

ソニック

「空か……………それじゃあ空でも飛ばない限り無理じゃ……………」

Ｔリンク

「あーあれ見てー!!」

ソニック

「何だ？」

トウーンリンクの指をさす方を見ると、上空にエインシャント卿がいた。

ソニック

「何だ？アイツは……。」

するとエインシャント卿はゆっくりと下降し、亜空間爆弾を設置する。

ウルフ

「あの大きな物は何だ？」

プリン

「プリ？」

すると二体のロボットが亜空間爆弾を起動させると、エインシャント卿は去って行った。

ソニック

「何だっただんだ？」

リンク

「それより、あれは何だろう?」

ソニック達は恐る恐る亜空間爆弾に近づく。

ウルフ

(ん?このカウントは……………まさか!?)

亜空間爆弾のカウントに目が入ったウルフは気付いた。

ウルフ

「お前ら!今すぐここから離れる!」

トリック

「えっ!?!」

ピッ!!

ドオオオオオッ!!

ソニック

「マ、マズイ!!」

カウントがゼロになると同時に亜空間爆弾が爆発し、亜空間が辺りに広がる。

ウルフ

「くそっ！間に合わない……………！！」

トリンク

「うわあああっ！！」

ソニック

「ノオオオオオッ！！」

プリン

「プリ…………ッ！！」

四人は亜空間に引きずり込まれてしまった。

ソニック

「……………うゝん、ホワッツ？ここは何処だ！？」

ソニックが目覚めると、辺りが暗くて空間が歪んでいる所にいた。

ソニック

「ヘイ！みんな起きろよ！！！」

トリック

「……………ん？」

プリン

「プリ……………」

ウルフ

「……………ハッ!!」

ソニックの声で他のメンバーが目覚めます。

トリック

「……………」

プリン

「プリ〜?」

ウルフ

「……………何か落ち着かねえ場所だな。」

ソニック

「ここが何処だか分からんが、どうやら俺達はその変な黒い物体に引きずり込まれたようだな。」

「リンク

「そんな……これからどうするの？」

「プリン

「プリプリ……。」「

「ウルフ

「出口を探すしかないだろ。」「

「ソニック

「イエス！そんなじゃ、早速探そうぜ！！」「

そう言うと四人は亜空間を歩き出すのであった………果たして彼らは亜空間から脱出する事が出来るのか！？

最終回く亜空間をさ迷う者く（後書き）

と言う訳で、序章編は終了です！ソニックは最後の最後に登場しますが、残りのキャラはシナリオに登場しないので、ソニックと共にタブーと闘う……とゆう設定にしてみました。如何でしたでしょうか？感想と意見をお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7890e/>

大乱闘スマッシュブラザーズX～亜空の使者・序章編～

2010年10月10日07時05分発行